

## 退院

仲 紀久郎

平成廿七年七月九日

壹月廿日に入院以來遂に半年を數ふ。入院の期限半年と定められたらば愈々退院の日の來たるなり。未だ？自力にては何事も爲す能はずと云へども期限は期限にて退院せざるを得ず。小生の入院中に妻はバリアフリー住宅を見付け獨力にて早々に轉居濟みなれば妻には感謝有るのみ也。

介護タクシーに車椅子にて乗り込み、病にて倒れたる南區浦舟町の「高砂家」てふラーメン屋の病院より意外なる近さに驚けり。救急車にての搬送時間はホンの十分なるか。當日は水曜日、週一回のみの出勤日にて浦舟町の元病院なる職場に出勤し晝食にラーメンを攝らんとて馴染の高砂家のカウンターにてラーメンを待つ。しかし、ラーメンは出來上がれどもラーメン鉢へと左手延びず。否、左手全く動かず。店主直ぐに小生の異常に氣附きて救急車を呼び給へり。誠に有難きかな。自宅と職場へは尙自力にて電話せり。職場からは同僚一人救急車に同乗これまた有難きなり。

是より數日間は記憶定かならず。ベッドに横に成りたる儘シーティースキャン等検査をうる覺えせるのみ。(以下改めて)

平成廿八年八月十二日

七月十日は參議院議員選舉投票日なり。當然病院にて不在者投票なすべきものとして問ひ合せたるところ、「退院豫定日は九日なれば今回は不在者投票不可なり」と。

扨て、退院の翌日は十日の投票日となり。當日は晴天なれば、妻投票所なる地區センターまで余を車椅子に載せ押し行けり。御蔭様にて無事投票し終へたり。車椅子より見る町の様子は今迄とは異なりて新鮮に感ず。特にコンビニ内部等棚が目前に迫りて面白し。半年振りの外出なり。日光を浴ぶるも久方ぶりなれば野球帽被りて歩道上をガタゴト移動をなすのみ。

平成廿八年八月廿參日

退院後のリハビリは自宅にて週二回づつ更にシニアセンターてふ處に出掛けて更に週二回の計一週に四回なり。されど、リハビリ病棟に居りし折は毎日二度行ひしを思へば半減す。

余の入院せし横濱市立脳卒中脊椎センターは専門病院なればリハビリ室には學生の研修生インターンとして多數來所す。内一人、スラリと背の高き女性有り。問ひし處、寶塚歌劇團の出身との事なり。「他人の役に立たむとて理學療法士を目指したり」とぞ云ひける。

或る日、病棟食堂にてボランティアによる音樂會有り。其の終りに「それでは皆さん、御一緒に歌ひませう。」とて「春の麗の隅田川・・・」と生まれど、余、歌ふ事を得ず。

所謂、音癡に爲りにけり。余の病輕きにあらざるは理解しをれども歌ふ能はずとは衝撃なり。そこで、リハビリ項目にSTとして歌の指導を御願ひす。小學唱歌等をゆるゆると音

程を取る練習なり。そこで、S T (言語聴覚士) の先生に「春の小川、櫻」等文語唱歌の歌詞改竄に就きて蘊蓄を傾けしところ先生甚く興味を示されたり。透かさず文語の苑へと話を振りたるに、先生、早速に文語の苑のHP御覽じあり、幹事の名前の内に「中島八一」先生の御尊名見出し驚きけりとの事なり。余、中島先生の御高名なること再認識せり。

(平成二十八年九月十六日受附)